

<学びの教室コラム> 「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト

ドキドキ わくわく学級経営

西田規子

1 はじめに

「教員人気下がっている」「倍率低下で、教員の質の低下が心配だ」「教員の仕事はブラックだ」などと言う話をよく聞く。

先生という職業に憧れや興味を抱いても、このような情報が先行すれば不安になるのは当然である。また、他の企業では入社式の後、数か月の新人研修を受けた後に、業務にあたるのが一般的だが、教員は、大学を卒業して一週間後には、学級担任を任され、経験年数が豊富なベテランの先生と全く同じように、担任という立場で学級を運営していかなければならない。

今回、「学級経営」をテーマにお話する機会をいただき、自身の教員としての歩みや実践をもとに「明日学級担任になってもなんとかやっていけそう」「先生という職業は、やはりやりがいのある楽しそうな仕事だ」と思ってもらえるよう現場の声をお届けすることとした。

2 学級経営とは

一口に「学級経営」と言っても、いったい何をすることなのだろうか。小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説特別活動編P143には『学級経営とは・・・その担任教師が学校の教育目標や学校の実態を踏まえて作成した学級経営の目標・方針に則して、必要な諸条件の整備を行い運営・展開されるもの』とある。表現の仕方に多少違いはあるかもしれないが簡単に言い換えると『子どもたち全てが安心できる学級をつくること』だと私は考えている。そのような学級でなければ、よい学びも成立しない。ところが、本校に在籍する採用4年目までの教員に「難しいと感じることは何か。」を尋ねたところ、「子どもとの関わり方」「トラブル・保護者対応」「ルールの徹底」等々の学級経営に難しさを感じていることが分かった。

3 学級経営の実際

では、何から始めればよいのか。学級担任を任されるとだいたい、5月の連休明け頃に学級経営案を作成する。学校によって形式はさまざまだが、学級開きから約一月かけて子どもたちの学力、人間関係、家庭環境、保護者の願い等の実態を把握し、ルールや学級目標を作成する。その過程で何を課題と感じ、今後どのような学級を子どもたちと創っていくか目標・方針をプランニングするのである。したがって、学級開きからの1週間や1ヶ月を「黄金の1週間・1ヶ月」と呼ぶのもいかにその時期が大切か物語っている。その時期は新しい体制で毎日本当にせわしない。しかし、担任は、毎日笑顔で余裕をもち、人として全てをあたたく受け止め、間違いに対しては大声での叱責や威圧ではなく、思いをしっかりと聴き、みんなが納得できるよう話をする。そんな安心感で包み、子どもたちがこの先1年間の期待と希望が膨らむようなスタートを切りたい。

また、学級づくりは子どもと一緒にやって行うものであるということを常に心がけたい。居心地のよい学級に通いたいとどの子も願っている。その学級づくりが自分たちでできていると

どの子も実感できれば学級への所属感や愛着は自然と湧いてくる。まずは、学級目標づくりを子どもと1年後の成長した自分たちの姿を思い浮かべながらわくわくした気持ちで作成していきたい。さらにその学級目標から歌・ダンス（体操）・旗・ポスター・成長カレンダー・お便りの題字・ワッペン・マスコット作成等につなげて可視化し、個々が運営に参画することで、目標が共有され、みんなが本当に安心できる学級になっているかどうか自分たちで振り返ることができる。完璧を求めず、失敗もやり直しも大丈夫という視点で担任は支援していく。

4 こんなときどうする？

学校で起こる具体的な場面を想定して学級担任としてどのような対応をするか演習を行った。いずれも実際にどの学校でも起こりうる事例を取り上げた。学級内で起こるトラブルは誰かに報告した時点で自身の責任は50%、管理職に報告した時点で0%と考えても過言ではない。学校はチームで対応にあたるので安心してよいが、大切なことは開示すること。それもできるだけ早いほうがよい。そこで、担任の心得「3つの門がまえ」を紹介した。学級担任は、経験年数に関わらず、良いことも悪いことも抱え込み、「閉じる」傾向が強い。「閉じる」と外からの評価が嫌みに聞こえたり、判断が自分勝手になったりするため、いわゆる危機管理意識が低くなる。そこで、「内（自分・学級内）」にも外（保護者・地域）にも開く」ことを心がけたい。具体的には「聞く」こと＝情報を仕入れること、と「問う」こと＝良いことも悪いこともできるだけオープンにすることである。担任になったその日から、毎日学級の窓を「開」いて、自分を含めた大勢の人の声を「聞」き、したことを世に「問」うことが大切である。

5 先生をめざしているみなさんへ

本校の採用4年目までの教員から、先生をめざすみなさんへのメッセージを紹介する。

- ・困ったときに先輩や主任の先生に助けを求めることが大切だと分かった。最初は大変だが、そこを乗り越えたら充実した日々になる。
- ・子どもの成長に感動し驚く。共に喜び合う等感情が揺さぶられるところが教師の魅力。子どもたちと向き合うことが自分と向き合うことにもなり、一緒に成長している感じがする。
- ・仕事ができる環境がありがたい。多くの先生方と関わり、相談したり助けてもらったりできる。忙しくても喜怒哀楽もあり達成感もとても大きい。

6 おわりに

書店に行けば、「学級経営」について書かれた本は山のようにあるし、ネットで検索すればおびただしい数の実践にもヒットする。それだけ、たくさんの先生方が学級経営に悩み、学級経営の大切さを実感しているということである。もちろんそれらを見れば共感もするし、参考にもなる。ただ、担任する学級の子どもは本やネットで検索してヒットする子どもと同じではない。だからこそ、自分が子どもを見て、子どもの話を聴いて、子どもと話したことを信じて、子どもと学級を創っていくしかない。でも、実は学級経営がうまくいく秘訣はとてもシンプルなのではないかと感じている。それは「いつも笑顔を絶やさず、温かく心地よい風で子どもたちを包む。」こと。まずはそこが基盤であり、自分も常にそのことを心がけて学校づくりに関わっていききたい。

西田規子（鳥取市立美保小学校教頭）